

スピノザの複合物体論の 「決定論的行為者因果説」解釈からの読み直し

木 島 泰 三

0. はじめに

0-1. 本稿の目的と構成

本稿は、木島 2011 で提示した、スピノザの因果理解を「決定論的行為者因果説」と見なす解釈を拡張し、スピノザの複合物体論をその観点から読み直す試みである。第 1 節では序論として「決定論的行為者因果説」のアウトラインをたどる。第 2 節は、実体／様態（＝実体の変状）／様態の変状（＝実体の変状の変状）、という階層構造を背景に、「行為の原因」と「有の原因」の区別を明確にする。第 3 節では、個体が他の個体を因果的に産出する過程を考察する。そしてこの考察の結果、我々は、個体に対するその構成諸要素の関係は、変状に対する変状の主体の關係に他ならない、という結論に導かれる。第 4 節では応用的考察として、このように解された物体論を要素還元主義および創発説と比較する。

0-2. 行為者因果とはいかなる因果関係か？

行為者因果 [英: agent causation] とは、行為者 [英: agent] を原因とし、行為 [英: action] を結果とする因果関係である (cf. Thalberg 1976)。行為者と行為はそれぞれ、文や命題における主語 (項) と述語に相当する、異なったカテゴリーに属する存在者であり、また、お互いに完全に分離した存在者とも言いにくい。そのような二者の間に因果関係を見いだすのは、因果関係を出来事因果 [英: event causation] と見なす現代の標準的な理解からは逸脱する。しかしそのような因果理解は、少なくとも行為者とその行為の関係を表すための我々の日常的語彙の中に埋め込まれている。そして我々は、スピノザがそのような概念を独自の仕方哲学的に洗練し、すべての因果関係に適用されるモデルとした、と主張する。

0-3. スピノザの行為者因果説の特異性

スピノザの行為者因果説の特異性は大きく言って 2 点ある。第 1 に、多くの行為者因果論者とは異なり (Lowe 2008 を除く)、行為者因果性を人間的行為に固有のものとはせず、すべての因果関係に認める点。第 2 に、恐らくすべての行為者因果論者とは正反対に、自由意志を否定する決定論的世界観と行為者因果説を結びつける点、である (木島 2011)。

このような因果理解は単なる中世思想の残滓ではなく、スピノザの一元論的立場に合致した思想である。例えばスピノザは「無力な物質」と「非物質的超越神」を共に退けて「物質に内在する神」を説き (cf. 1P15S), 「受動的観念」と「能動的自由意志」の二能力的判断論を退けて「自らに肯定を含む観念」を説いた (2P49S)。同様にスピノザは「必然的出来事因果」と「自由意志に基づく人間の行為者因果」の二元論を退け、「必然的行為者因果」の一元論を唱えたと位置付けることが可能である。

1. 行為者因果説としてのスピノザの因果理解を読む試みの概略

1-1. スピノザの存在論

スピノザの存在論の基礎的なカテゴリーは、実体 [substantia] あるいは主体 [subjectum]⁽¹⁾ と、その実体ないし主体に内属 [英: inhere] する変状 [affectio] である。この観点から、『エチカ』に登場する存在者を、(1)実体／(2)実体の変状である様態／(3)様態の変状、の3つにさしあたり整理できる⁽²⁾。つまりまず、(1)唯一実体である神は究極の主体であり、それ自身が他の主体に内属することはない (1Def3)。また、(2)この実体を主体とし、それに内属する変状が「様態 [modus]」と呼ばれる (1Def5)。様態は無限様態と有限様態に分けられ⁽³⁾、人間身体や人間精神 (= 身体の観念 (2P13)) のようないわゆる個物 [res singulares, res particulares] は有限様態の一種である (1P25S)⁽⁴⁾。さらに、(3)個物を主体とし、それに内属する諸変状がある。これに属するのは身体運動つまり広義の行為⁽⁵⁾、想像作用、喜びや悲しみの感情、欲望などである⁽⁶⁾。

1-2. 個物が様態であるとはどのような意味か？

実体および主体は文法的な主語ないし項に対応し、変状とは文法的な述語に対応する存在者である、と見るのが一般的理解である。だが、物体のような個物が、変状の主体であるだけでなく、それ自身が神の実体に内属する変状ないし様態である、とする主張は、個物を神に述定される述語や性質 [英: property] のようなものと見なす主張であるように思われる。このような主張はたしかに奇妙に響く。それゆえカーリーは、このような解釈は「カテゴリーミステイク」を含み、スピノザに帰すべきではない、と考えた⁽⁷⁾。カーリーが代案として提示するのは、実体と様態の関係は、普遍的な自然法則への個物の因果的依存関係である、という解釈である (Curley 1969)。

カーリーのこの解釈は大きな影響力をもったが、これに反対し、より伝統的な「実体と様態」の意味を保存すべきだという解釈も試みられてきた。現代この方向で人気のある解釈は、様態をトロープ [英: trope] すなわち個別者として解された性質として位置づける解釈である (Jarrett 1977; Carriero 1995; Melamed 2009; 松田 2009, cf. Viljanen 2009)。

ベネットの「場の形而上学」解釈は、トロープ説解釈に近い立場に立ちつつ、様態をトロープではなく普遍者として位置づけた上で、実体-様態関係に関する一つの一貫した見取り図を与える (Bennett 1984 sec. 20-26, cf. Viljanen 2007, Melamed 2009, 松田 2009)。それによればまず、延長属性の下で

見られた実体とは、様々な性質の担い手としての無限な場あるいは空間であり、そこに存在する諸物体とは、この無限な空間の一領域 [英: region] が帯びる状態変化であると見なされる。「雪解けが平野を横断する」と言うとき、「雪解け」に相当する実体はその領域を運動していくわけではない。同様に、例えば小石という物体がそこに存在しているとは、無限な延長体のある領域が、一時的に「小石的な状態」を帯び、あるいはそのような性質を例化 [英: instantiate] していることだと解される。

我々の解釈は実体と様態の関係を主体に対する性質 (状態) の内属関係と解する点で、トローブ説解釈やベネットの解釈と軌を一にする。さらに言えば、主体と性質の間の存在論的区別を認める点では、トローブ説解釈よりもベネットの解釈に近い⁽⁸⁾。ベネットの解釈への我々なりの批判ないし補完は、3-2節で行う。

1-3. 内在的因果と他動的因果

我々がスピノザの因果概念を行為者因果説であると解する根拠は、変状と変状の主体との間に、スピノザが明らかに「因果関係」と呼ぶべき関係を認めていることにある。

神に関して言えば、スピノザが神をその諸変状ないし諸様態の「原因」として名指す箇所は極めて多い (1P16C1-3, 1P17C2, 1P24C, 1P25 等)。特に次の一節は重要な概念を含む。

神はすべての諸事物の内在的原因 [causa immanens] であって他動的な原因 [causa transiens] ではない。(1P18)⁽⁹⁾

近世スコラ学でなされていた定義によれば、「内在的原因」とは「その結果を自己の内に生じる原因」であり、「他動的な原因」とは「その結果を自己の外に生じる原因」である (Heereboord 1654)。ここで注目すべきは、神がもつぱらそれでしかありえないとされる「内在的原因」というあり方が、行為者が行為の原因となる行為者因果のあり方にまさに合致する、という点である。すなわち、神以外のすべての事物は唯一実体たる神に内属する諸変状であるから、神は自らが所有する諸変状の「原因」であり、しかも諸変状の内の少なくともあるものは「行為」である。これは「行為者因果」の関係に他ならない。他方、個物あるいは有限様態に関しては、下記の一節が大きな根拠となる。

「能動する [=行為する] [agere]」と私が言うのは、我々の内あるいは外に、我々がその十全な原因であるような何かが生じる…場合である。他方で我々が「受動を蒙る [pati]」と私が言うのは、我々がその部分的な原因でしかないような何かが、我々の内に生じる、あるいは我々の本性から生じるような場合である。(3Def2)

ここで注目すべきは、「我々」すなわち人間が、「我々の内に生じるもの」および「我々の外に生じるもの」の「原因」と名指されている点である。「我々の内に生じるもの」とは「身体変状」および「身体

変状の観念」に他ならないが、その内の少なくとも一部はいわゆる「行為」に相当する。これは行為者と行為の間の因果関係、すなわち行為者因果であり、また上述の定義に照らせば、このような場合の行為者は「内在的原因」と呼ばれうる⁽¹⁰⁾。他方、「我々の外に生じるもの」とは行為の外的諸帰結を指すと思われるが、人間はそれらに対しても「原因」と言われている。この場合の行為者は、やはり先の定義に従い、それら諸結果の「他動的原因」と呼ばれよう⁽¹¹⁾。

1-4. 因果連鎖の構造

このような因果概念はいかなる因果連鎖を生み出すであろうか。

第1に顧慮すべきは、有限な個物は自分自身で自分自身を行為へと決定することができず (1P26; 1P27)、むしろ行為するために、他の有限な個物から行為へと決定されねばならない (1P28)、ということである。

第2に顧慮すべきは、次の規定である。

…何らかの物体が変状される際のすべての諸様式は、変状する物体の本性と同時に変状される物体の本性から生じる (2L3の後のAx1)。それゆえに、それら〔変状される際の諸様式〕の観念は (1Ax4により) 双方の物体の本性を必然的に包含する…。 (2P16Dem)

すなわち、ある個物の行為は、その個物をその行為へと決定した他動的原因と、当の個物自身である内在的原因の、いわば協働として生じることになる。

この2つの考察を組み合わせることで、諸個物間の因果連鎖のあり方を理解できる。

個物Aが個物Bを行為bへと決定するとしよう。行為bは、他動的原因であるAと、内在的原因であるBの協働として産み出される。ここで行為bは自動詞として記述され得る身体運動であるが、それにとどまらずBの外部にさらなる結果cを他動的に産出する (cf. 1P36)。スピノザの世界は充満論的世界であり (cf. 1P15S)、結果cは他の個物Cの内に、Cの変状ないし行為として産み出される。その産出様式はやはり、他動的原因となったBと、内在的原因Cとの協働である。そうして今度はCが、こうして産み出されたCの行為cを通じて、Cの外部の個物Dを、個物Dとの協働的原因によって、行為dへと決定する。かくして、次のような連鎖が成り立つ。

各々の個物、あるいは何であれ有限で限定〔決定、規定〕された現実存在 [exsistentia] をもつ事物は、他の、それもまた有限で限定された現実存在をもつ原因によって現実存在および作用 [operandum] へと決定されない限りは、現実存在および作用へと決定されることができない。さらにこの原因もまた他の、それもまた有限で限定された現実存在をもつ他の原因によって現実存在と作用へと決定されない限りは、現実存在と作用へ決定されることができない。このようにして無限に続く。(1P28)

ここで示される因果連鎖は、単純な出来事因果の過程としてではなく、行為者因果の過程と解されるべきである。出来事因果の図式によれば、原因となる出来事は結果となる出来事の必要十分条件を提供し、つまり後者を全面的に決定する。しかるにその原因もまた先行する原因となる出来事によって全面的に決定されている。出来事因果とはこのような全面的被決定の無限の連鎖である。ところが、行為者因果の図式においては、個物が他動的原因により行為へと決定されるとき、その個物は（完全に無化されない限りは）他動的原因に対する全面的被決定の関係に置かれることはなく、むしろ内在的原因として、結果の産出において何らかの度合いでの因果的寄与を果たす。つまり、個物の被決定はあくまでも部分的被決定に留まるのである⁽¹²⁾。

1-5. 内属関係と行為者因果的因果関係の統一的理解

行為者因果関係がスピノザにおける因果関係の基礎である、という我々の考察は、次の2つの命題を結びつけて理解することを可能にするように思われる。

様態について私が解するのは実体の諸変状 [affectiones] あるいは、他のものの内に在り、またその他のものによって概念されるようなものである。(1Def5)

結果の認識は原因の認識に依存し、かつそれを包含する。(1Ax4)

前者で述べられているのは様態の実体への存在的かつ概念的な依存関係、すなわち内属関係である⁽¹³⁾。後者で述べられるのは因果関係であり、我々はそれを行為者因果関係として理解した。ところで行為者因果関係とは、行為の行為者に対する存在上の依存関係であるが、この公理はまた、その関係が概念的な依存関係でもあることを告げる。それゆえ、内属関係と行為者因果関係はかなり広範な範囲で重なり合うことになる。つまり、多くの事例において、**内属関係という存在的かつ概念的な依存関係と、因果関係という、やはり存在的かつ概念的な依存関係は、重なり合って成立しているのである。**

たしかに、この2つの依存関係が重ならないように見える局面がいくつかある。

第1に、内属関係のすべてが行為と行為者の関係ではない、という指摘が可能である。つまり、「行為」の概念をどう解するにしても、それは少なくとも何らかの状態変化でなければならないように思われる。しかるに、ある主体が所有する静的な状態ないし性質もまた、その主体に内属していると言われうる。ゆえにそのような静的状態の単なる所有は、内属関係ではあっても因果関係ではない、と考えられるかもしれない。

しかし、この点に関しては、スピノザが「産出の原因」と「維持の原因」を同等のものと見ていたこと(1P24)、そして、自己保存のコナトゥスが行為への力であると共に自らを維持する力でもあったこと(3P7Dem)を顧慮することで、両者の一致を確保できるように思われる⁽¹⁴⁾。つまり、たしかにすべての変状は状態変化という意味での行為ではない。しかし、静的な変状の単なる維持も、その個物の

「自己維持の力」の行使として理解できる。かくして、すべての内属関係を主体と変状との因果関係として解することができる。つまり静的変状を所有する主体もまた、その変状の「維持の原因」と呼ばれるのである⁽¹⁵⁾。

だが第2に、内属関係ではないような因果関係が明らかに存在する。つまり、たしかに神においては、すべての因果は内在的因果であるが、有限者において内在的因果はさらにその有限者の外部に及ぶ。つまり有限者は外部の諸結果の他動的原因ともなりうる。そして他動的原因関係は明らかに内属関係と重なり合わない。

しかしこの第2の不一致は、内属と因果という関係を重ね合わせて理解することを拒むものではない。むしろこの不一致は、因果関係の方がより広いカテゴリーであり、内属関係とはその部分集合である、と解しうる可能性に開かれている。つまり因果関係には他動的原因と内在的因果があり、いわゆる内属関係とは後者を指すための概念だった、と考えれば、行為者因果的な因果関係をより広く、またより基本的な関係として解することが可能である。以下、そのような解釈を先に進めていきたい。

1-6. 我々の図式に取り込めていない事柄 — 本論考の課題

以上の図式は今のところ、少なくとも以下の2点を十分に扱えていない。

1つは、スピノザが上記の定理では明示していない事態である。すなわち、我々とスピノザは今のところ $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow \dots$ という単一の個物間の単線的な因果を論じてきたが、実際には多くの事物が1つの結果を生み出す事例や、1つの原因が複数の事物にその結果を生み出す事例などがありうる。しかしこの点の拡張は困難ではない。特に前者の事例に関してはスピノザ自身がいくつかの箇所述べている(2Def7, 3Def1, 3P7Dem)。

だがもう1つ、スピノザが明示的に述べているのに、我々のモデルにおいては未だ扱われていなかった事例がある。すなわち、我々は今のところ、現実存在する個物が、すでに現実存在する他の個物を「行為へと決定する」という事例のみを扱ってきたが、上記 1P28 には、現実存在する個物が、未だ現実存在しない個物を「現実存在へと決定する」つまりは他の個物を生成させる、ないし産出する、という事例もまた語られている。

たしかに、我々が扱ってきた範囲内にも、「未だ現実存在しなかった存在者を現実存在へ決定する」過程は存在していた。つまり、個々の行為は、個物が内在的ないし他動的に新たな変状としての行為を産出する過程、つまり個物がその行為を「現実存在へと決定する」過程に他ならない。しかし我々は未だ、個物そのものの産出に関しては扱えていない。とはいえ有限者である個物は、無限者から直接産出されることがありえず(1P21, 1P22)、他の個物あるいは有限な原因から産出されねばならない(1P28)。ゆえに我々は「個物による個物の産出」という局面をどう理解すべきか、考察する必要がある。

本論考の1つの目的は、この「個物による個物の産出」の詳細を明らかにすることにある。そしてその検討が、我々を複合物体論ないし個体論の読み直しへと導くのである。

2. 「行為への決定」と「有への決定」の差異

2-1. 内属的依存関係は推移的であること

スピノザは「すべて在るものは神の内に在る」と言う(1P15)。この言葉は、我々が上で見たような内属関係は、推移的な関係であると考えを許す。なぜなら物体の変状も「在るもの」の一種であり、スピノザはそれもまた「神の内に在る」すなわち神に内属すると述べる。ここからして、神は究極の主体ないし究極の行為者であり、「人間の歩行」が「人間」に内属し、「人間」が「神」に内属するのならば、「人間の歩行」は「人間」に内属すると共に「神」にも内属する、という推移的關係が成り立つと考えうるであろう⁽¹⁶⁾。

2-2. 「準個物」として見られた個物の変状

いわゆる個物の生成ないし産出の問題に移る前に、身体的行為や感情といった個物の変状それ自体もまた「準個物」として取り扱われうるという可能性を指摘しておきたい。

まず、以下のテキストが示唆するように、個物の変状はそれ自身のコナトゥスをもつ。

受動 [passio] の強さ [vis] と成長 [incrementum]、および受動の現実存在への固執は、我々がそれによって現実存在へ固執しようと努めるコナトゥスによっては定義 [definitur] されず、むしろ我々と比較された、外的原因の力によって定義される。(4P5)

さらに、この身体の変状は(4P5により)、自己の有に固執する強さ [vim] を、自己の原因から受け取る。(4P7Dem)

1つ目の定理では、「受動」すなわち我々の内に他動的原因によって引き起こされた変状(受動感情)に、それ自体の「強さ」「成長」「現実存在への固執」が帰されているように読める。2つ目の定理においてはより明確に、「自己の有に固執する強さ」の主体として「身体変状」が名指されている。

またスピノザは、身体内部での諸変状間の一致や不一致、相互の促進や破壊といった事態をしばしば語る。例えば次の公理においてそれは示されている。

もしも同一主体の内に二つの反対の行為 [actiones] が喚起されたとしたら、必然的に、両方の行為の内にか、あるいは一方のみの行為の内、それらが反対であることをやめるまでの間、変化が生じねばならない。(5Ax1)

つまり、各々の身体変状、および身体変状の観念は、お互いに一致や反対の關係に立ち、相互に促進し

合ったり破壊し合ったりする。

さらに、諸変状はそれら相互の間で因果的連鎖を形成するように思われる。例えば愛や憎悪のような感情は様々な欲望を生じさせる原因であり、また様々な欲望は外的行為を引き起こす原因であるように思われる (e.g. 3P13S, 3P32S, 3P37)。

これらの叙述は、物体の変状それ自体を、一定の自立性を備えた、一つの個物ないし「準個物」のように扱っている、と見ることが可能である。この見方は、ある点で出来事因果説の図式により近い見方であり、また個物をトロープの束と見なす見方とも似たところがある、とまずは言えよう。

2-3. 「行為の原因」と「有の原因」の依存関係の差異

しかしながら、スピノザの形而上学は直ちに、そのような「準個物」の依存的性格を想起させる。というも、スピノザにおいては、いわゆる個物ですら、すぐれて依存的な存在者であったのであり、つまり個物は神的実体の変状であり、神なしでは現実存在することも概念されることもできないような仕方で神に依存しているのであった。そしてそれと同様、様態の変状はその主体である様態、およびそれを協働的に産出した他動的原因に、それなしでは現実存在することも概念されることもできないような仕方で、全面的に依存しているのである。

我々は先に、個物を行為へと決定する他動的原因に対し、当の個物は、(それが完全に破壊されない限りは)全面的に依存することはなく、その依存関係は部分的なものに留まる、と指摘した。しかしながら、産出された行為とその原因との関係に関して言えば、それは部分的依存関係というよりもむしろ全面的依存関係である、と言うべきである。前者における他動的原因があくまでも、すでにそれ自身の現実存在を有している行為者の「行為の原因」であるのに対し、後者における原因は行為の「有の原因 [causa essendi]」(cf. 1P24C)である。すなわち、すでに固有のコナトゥスを有している事物は、「行為の原因」に対して全面的被決定の関係に置かれることはなく、むしろ内在的原因として結果(行為)の産出に寄与する。他方、事物は、その事物を産出し維持している原因、すなわち「有の原因」に対しては、全面的依存関係に置かれるのである。

神的実体への個物の依存と、個物へのその個物の行為(例えば歩行)の依存、というこの二つの関係は単なる類比ではなく、レベルこそ異なるとはいえ、主体に対する変状の依存関係、という同一の関係である。また、2-1で見たようにそれらの関係は推移的である。つまり、個物の行為の直接の主体は個物であるが、それはまた究極の主体ないし実体である神に内属する変状でもある。

なお、「AによるBの全面的決定」は「BのAへの還元」ないし、「Bの消去・無化」を意味するわけではない。神と個物の関係に即して言えば、個物とは神の力を表現する様態であり(1P25S)、一定の因果的な力の担い手なのであって、単なる無ではない。同じことは例えば「歩行者」と「歩行」の関係についても言える。とはいえもちろん、この論点を逆方向に進め、変状の主体が個々の変状の単なる「束」に還元される、と主張することもできない。それは事物とその変状の間の区別の廃棄、あるいはそれらの依存関係の転倒であって、スピノザの教説からの明確な逸脱である。

2-4. 3階以上の変状は存在するか？

様態の変状を「準個体」として位置づけるということはまた、様態の変状それ自体がさらなる変状の主体となりうる可能性を示唆する。身体変状とは実体の変状の変状、すなわち2階の変状であったので、この可能性は「3階以上の変状は存在するか？」という一般的な問いを導く。

少なくとも概念的には、この問いに肯定的に答えることはそこまで奇妙なことではない。変状が個物に述定される1階の述語として、文法的には動詞や形容詞として表示されるのと同様、変状の変状は変状に述定される2階の述語として、文法的には副詞的修飾語によって表示されるものに相当する存在者だ、と解することができる。

では、スピノザは「様態の変状の変状」を明示的に認めているだろうか。さしあたりの我々の答えは、それを明示的に拒絶するテキストはなく、また、それを認めないことはかえって不整合を招く、というものである。個体の存在論的位置づけを「様態」ないし「実体の変状」と定め、変状である個体がさらなる変状の主体となりうることを認めている以上、より高階の変状の余地を認めないことはむしろ難しい、とすら言えよう。

だがたしかに、スピノザがそれを明示的に支持しているテキストも見いだせないことも、我々は一方で認めるべきである⁽¹⁷⁾。しかし我々は次節において、スピノザの複合物体論の我々の解釈が、3階以上の変状、さらに言えば恐らく無限の変状の階層が存在する、という見方に説得力を与えることを示すであろう。

3. 個物による個物の産出の考察

以上を踏まえた上で、本節では個物の生成、あるいは個物による個物の産出における因果関係の構造を、行為者因果の観点から理解し直す。ところで、個物の生成とは、個物が諸要素から構成される過程と見られる。従って我々は最初に、スピノザが諸要素による個物の構成を論じている、複合物体論を検討する(3-1)。次にそれに基づき、まずは「個物による個物の破壊」を考察する(3-2)。ここからさらに「個物による個物の産出」を、第1にその他動的原因に関して(3-3-1)、第2にその内在的原因に関して(3-3-2)、明らかにする。そして以上の考察から我々は最終的に、「変状の階層」と「複合物体の階層」との間の、意外とも思われる密接な結合を見いだすはずである(3-4)。

3-1. 複合物体の形相について

スピノザは複合物体または個体の定義と見られる類似の定義を、2箇所において与えている。

個物 [res singulares] について私が解するのは、有限であり規定〔決定〕された現実存在をもつ事物である。ところでもし、多くの個体 [individua] が、すべてが同時に一つの結果の原因とな

るように一つの行為へ協調する [concurrant] としたら、私はその限りでそのすべてを一つの個物であると考察する。(2Def7)

何らかの、同じ大きさ、ないし様々な大きさの諸物体が、互いに寄りかかるような [invicem incumbant] 仕方でそれら以外の諸物体から囲まれるとき、あるいはそれらが、同じ速さまたは様々な速さで、互いに運動を一定の比で伝達するような仕方で動かされる場合、それら諸物体は互いに合一していると我々は言い、またそのすべてが同時に一つの物体または個体を構成する、と我々は言う。そしてその一つの物体または個体は、この諸物体の合一によって他の諸物体から区別される。(2L3Cの後の Def)

これらの定義は共に、要素的個体（個物）から複合的個体が形成されうることを述べている⁽¹⁸⁾。そしてスピノザはこれに続く一連の補助定理で、そのように形成された複合物体の「形相」がいかに維持されるかを説明する。それによればまず、複合物体を構成する諸物体の一部が離脱しても、同一本性の別の物体が同じ場所に組み込まれれば、全体としての複合物体の形相は維持される(2L4)。また、物体が全体として増大または縮小しても、構成諸部分の「運動と静止のある比」が維持されれば、形相は保持される(2L5)。同様に、複合物体の構成諸部分の一群（例えば四肢）が全体として一定方向への運動を行っても(2L6)、または複合物体全体が一定方向への運動を行っても(2L7)、その際にやはり「運動と静止のある比」が維持されれば、複合物体の形相、つまりその自己同一性は保持される、とされる。

スピノザはこのような複合物体論を、まず「運動と静止、迅速と緩急のみによって相互に区別される」ような「最単純物体」から構成される1階の複合物体から始める。しかしスピノザはまた、1階の複合物体がお互いに合一し、2階の複合物体を構成しうること、2階の複合物体からさらに高階の複合物体が構成され、その階層構造は最終的に宇宙全体が1つの無限な複合物体と見なされるところまで続くことを述べ(2L7S)、また人間身体が極めて複雑な高階の複合物体であることを告げる(2Post1)。以上がスピノザにおける複合物体論、あるいは個体論の概観である。

3-2. 複合物体の消滅ないし破壊

以上の考察から、最初に複合物体の消滅ないし破壊を考える。

まず、消滅または破壊とは、延長である限りの延長が無に帰することではなく(1P15S)、ある複合物体を構成する低次の諸物体の配列が変化し、複合物体の形相つまりその自己同一性がもはや維持されないような配列へと移行する、ということと理解される(cf. 4P39S)。

この配列の変化には、少なくとも2通りの可能性が考えられる。つまり、構成諸部分が以前とは別の仕方で合一することで、以前構成されていた複合物体とは別の複合物体を構成するようになる場合と、諸物体が複合物体を構成せず、単なる「集塊 [aggregatum]」と化する場合とである⁽¹⁹⁾。

この区別は、スピノザの複合物体ないし個体の定義からしても必然的に導かれうる区別である。また、前者の事例よりも後者の事例の方がはるかに多いはずである、と考えられる。なぜなら、ある空間領域に存する諸物体のすべての組み合わせが複合物体を形成することはありえず、その中のごく限られた組み合わせのみが複合物体でありうるに過ぎないはずだからである。

この区別は、前述したベネットの「場の形而上学」解釈に欠けているように思われる、個体の位置づけの問題を補うものとなるように思われる⁽²⁰⁾。というのも「場の形而上学」を無条件に適用すれば、無限な空間のある限られた領域、あるいはその領域に存在する変化や状態は、すべて等しく、その領域を「占める」様態として存在している、ということになるからである。つまりこの見方は、1つの個体を構成する空間領域と、諸個体の集塊に過ぎないような空間領域の区別を、それ自体では与えないのである。だが我々はここで2Def7（または2L3Cの後のDef）を参照することで、「単なる空間領域」と「個体であるような空間領域」とを区別できる。つまり、ある領域を占める諸様態が、全体として1つに結合して振る舞い、全体が1つの結果を産出するように協働するとき、その領域は1つの複合物体ないし個体を構成するのである。

3-3. 人間を例にした複合個体の生成と維持について

以上のような「個体の消滅」を引き起こす他動的因果のあり方を逆に考えれば、「個体の生成」をもたらす他動的因果のあり方が見いだされる。つまり、他動的原因Bが、個体Aを生成せしめるのは、Bが、Aの要素となるより単純な諸個体の集塊（ないし別の形相の個体）に働きかけ、それらからAを形成するように働く場合、ということになる。これがいかなる物体の振る舞いに相当するのかを、個体を産出する他動的原因と、そこに同時に働いているはずの内在的原因に分けて考察していこう。

3-3-1. 個体の生成および維持の他動的原因

個体の現実存在の他動的原因とは、その個体の「産出の原因」および「維持の原因」ということになるが、すでに見たように、スピノザはその両者を同一視している（1P24S）。そして「維持の原因」に関して言えば、「人間身体」を例にした次の一節をその叙述と見ることができる。

人間身体は、保存されるために、極めて多くの他の諸物体、それによって人間身体が継続的にいわば更新される [regeneratur] ところの諸物体を、必要とする。（2Post4）

また、スピノザはこの要請に基づき、ある定理の証明において次のように述べる。

…人間精神は人間身体の観念あるいは認識であり（2P13による）、それは（2P9により）他の個物〔単数〕の観念に変状したと考察される限りの神の内に、たしかに在る。あるいは、（2Post4により）人間身体は極めて多くの他の諸物体、それによって人間身体が継続的にいわば更新されるとこ

ろの諸物体を、必要とする。そして諸観念の秩序と連結は、(2P7により) 諸原因の秩序と連結と同一であるので、この観念〔単数〕は極めて多くの諸観念に変状したと考察される限りの神の内に在るであろう。… (2P19Dem)

ここで述べられている「極めて多くの他の諸物体」、つまり個体を取り巻く環境を構成し、個体の産出と存続がそれに依存している諸物体こそ、個体の現実存在の他動的原因と呼びうるであろう。すなわちそのような外的諸物体は、後に個体を構成することになる要素的諸物体の集団に働きかけ、それらの諸物体が集団的に当の個体を産出し、維持するように決定する、他動的原因なのである。より具体的に言えばこれは、人間身体は多くの諸物体の因果的な交渉の産物であり(現代なら進化の歴史の所産であるということになろう)、また多くの諸物体に因果的に依存して自己を維持している、という事態を捉えていると言えよう⁽²¹⁾。

3-3-2. 個体の生成および維持の内在的原因

内在的原因についてはどうだろうか。すべての因果は他動的原因と内在的原因の協働によってなされる、というのが、我々が個物の「行為への決定」に関して見いだした結論だった。そしてこの原則は「個体の現実存在への決定」においても成り立たねばならないと我々は考える。というのも、「無からの」他動的産出はありえず、むしろ他動的原因が何ものかに働きかけ、その何ものかとの協働によってのみ結果が産出されるはずだからである。つまり、個体の無は完全な虚無ではなく、あくまでその個体の形相の無に過ぎない。そして、個体の産出以前に他動的原因と協働して個体を産出するもの、つまりは個体の産出の内在的原因となるものは、後に個体の要素的な諸部分となるはずの諸物体である。つまり、産出された個体が占めるであろう空間領域を何らかの仕方で(集塊としてか、あるいは他の形相の個体として)占める、要素的な諸物体の集まりこそ、他動的原因と協働して当の個体を産出する、内在的(諸)原因である。それら要素的諸物体が、環境より一定の他動的原因を与えられることで、相互に協働して、内在的原因として一定の結果を産出するとき、そこで産出され、維持される結果こそ、高階の個体、あるいはその個体の形相である、ということになるはずである。

我々はここで、(諸)個物が内在的に産出し維持する結果は、その(諸)個物に内属する変状である、という基本的な図式をあくまでも当てはめるべきである、と主張したい。そして、このとき言えそうなのは、個物ないし個体が産出され維持されると言うとき、我々が理解している「個物ないし個体」とは、ある空間領域を満たす全物体の総体そのものではなく、むしろその空間領域において成立した一つの形相、すなわち諸物体の配置の様式である、ということである。なぜなら、繰り返せば、個体は全くの無から産出されるわけではなく、むしろ個体の産出ということで解されるのは、それ以前からその領域を占めていた諸個体の一定の結合様式の産出、つまりは**個体の形相の産出**なのだからである。ところで、そこで個体の形相と呼ばれる諸物体の一定の結合様式は、内在的原因としてそれを生み出した諸物体が協働的に所有する、あるいはそれらに内属する、一つの変状であった。従って、**個体の形相とは、その**

要素的諸部分、ないし要素的諸様態が協働的に所有する、高階の変状である、ということになるであろう。

3-4. 変状の階層としての複合個体の階層

以上の結論から、我々は2-4で提起した「3階以上の変状は存在するか」という問いに明確な答えを与えることができる。

3-1で見たように、複合物体は最単純物体から無限宇宙の総体に至るまでの無限階の階層を構成する。しかるに3-3-2から引き出されたのは、複合物体、あるいは複合物体の形相とは、その複合物体の構成諸物体を集团的な行為主体とし、それらの主体に集散的に内属する、高階の変状であった、ということである。それゆえ、我々が通常個物あるいは有限様態と見なしている諸物体は、暗黙に想定されていたように神に直接内属する1階の変状であったわけではなく、むしろすでに高階の変状であった、ということになる。

この構造を以下のように図式化することができる。まず、ある個体の形相は、その個体を n 階の個体とすると、 $n-1$ 階の諸個体を協働的な内在的原因とし、それらによって産出され維持されている変状である。例えば「人間」は n 階の変状であり、「人間の歩行」は $n+1$ 階の変状であるとすれば、人間の形相を直接に構成する要素諸個体は $n-1$ 階の諸変状である。つまり人間の形相とは、それらの個体が行為者として協働的に産出し維持する行為、「人間」にとっての「歩行」のような)に相当する、ということになる。

ところで $n-1$ 階の諸個体の各々の形相はまた、 $n-2$ 階の諸個体の協働的な内在的原因の結果生じた変状である。このようにして我々は複合個体を構成する諸部分の階層の数だけ、変状の階層を遡ることができる。そして最終的に行き着くのは、複数の最単純物体が、第1階の複合物体の形相を協働的に産出する、という局面である。それゆえ、**個体が属する空間領域を満たしている最単純物体の集合体こそ個体の形相の、(神に次いで)究極的な内在的原因である、**ということになるであろう。

以上の考察によっても、2-4で提起した「身体変状はそれ自身さらなる変状の主体たりうるか」という問いは未決のままである。しかしながら我々は、それよりも一般的かつ根本的な「3階以上の変状は存在するか」という問いに対して、明確に肯定的な解答を手にした。そして後者の問いが解決されてしまえば、前者の問いは、それほど重要ではない問題となる。すなわち我々は、我々の身体が、すでに極めて高階の変状である n 階の要素的諸物体を内在的原因とする $n+1$ 階の変状であること、また従って我々の身体変状が $n+2$ 階の変状であることを明らかにしたのであり、明らかになっていないのはただ、スピノザがさらに $n+3$ 階および、それ以上に高階の変状を明示的に認めていると解される箇所が『エチカ』や他の著作に存在するかどうか、というローカルなテキストの問題のみである。このテキスト上の問題がどのように決着するのであれ、スピノザがそのような高階の変状の存在に余地を与えていることは、十分な説得力をもって主張しうるのである。

まとめておこう。個物の産出も、内在的原因および他動的原因としての他の個物の協働的な因果によっ

てなされる。人間身体の場合、その他動的原因＝行為者は人間身体を生み出し、維持している外的諸個物であり、その内在的原因＝行為者は人間身体を構成する1階層下の要素的複合諸物体である。同様の考察はその要素的複合諸物体にも適用され、最終的に、最も基礎的な内在的原因＝行為者であるような有限様態とは最単純物体である、ということになる。それゆえ最単純物体は、神という最も基礎的な原因＝行為者のみに内属し、諸々の行為を産出する、最も基礎的な変状である——以上が、我々の考察が明らかにした個物の「有の原因」の構造である。

4. 応用的考察——要素還元主義および創発説との比較

実体は個物の内在的原因であり、個物はその個物の変状の内在的原因である。これら内在的原因においては結果と原因が空間領域を共有し、また結果は原因に対して全面的依存関係にある。同様に、複合物体はその内在的原因である諸部分に全面的に依存し、それら諸部分もまた下位の諸部分に全面的に依存し、下位の諸部分はさらに下位の諸部分に全面的に依存する。こうして我々はこれらすべての変状の階層が、最基底の内在的原因である最単純物体に因果的に依存することを見いだす。最単純物体は第1階の個物であると共に、実体に直接内属する第1階の変状でもある。すなわち、無限な空間を様々な運動で満たす最単純物体の総体こそ、第1階の様態である⁽²²⁾。

我々のこのような見方は、一方で要素還元主義 [英: reductionism] を彷彿とさせる。つまり最も基礎的な粒子が最も基本的な存在者であり、他の存在者はその変状つまり「あり方」としてのみ存在する、ということになるからである。

しかしながらこの見方は、複合物体を単なる随伴現象たらしめるものではない。なぜなら、それは下位の諸要素によって全面的に決定されているとはいえ、しかしそれが個体である以上は、「すべてが同時に一つの結果の原因となるように一つの行為へ協調するように」(2Def7) 振る舞う。つまり、各々の高階の個体は、それ自身に帰される因果的力をもつ。そして1P36によれば、およそそれ自身の因果的力をもつ存在者は、それ固有の現実存在をもつ存在者である。

そこで上位個体は、一つの結果をもたらしうる因果的力を帰属されることにより、要素諸個体の単なる集塊に還元されない、一つの新たな存在者として現実存在を始めたもの、と見なされてよい。この点に我々は、創発説 [英: emergentism] に近い見方を見いださう。それは因果的な力の流れに、一つの新しい集約点が生じるという意味で、新しい存在者の出現ないし創発である。しかしながらこれは、我々が見てきたように、その新しい存在者が、その諸要素に因果的に、あるいは存在的かつ認識的に、全面的に依存している、という想定とも両立するのである。

スピノザの立場はこのように要素還元主義と創発説の納得しうる論点を共に取り込み得ていると我々は考える。それが可能になっているのは、スピノザが因果概念を行為者因果として捉えているがゆえにである、と我々は主張しておきたい。

凡例

『エチカ』からの引用はゲプハルト版を用い、以下の略号を用いた—Praef/序言, Def/定義, Ax/公理, Post/要請, P/定理, L/補助定理, Dem/証明, C/系, S/備考, App/付録

注

- (1) スピノザは時に「様態」のあるものを「主体」として名指す (3P5, 5Ax1)。また神的実体を諸様態の「主体 [subjectum]」と名指す事例も、少数であるが初期著作に見いだされる (『神・人間・人間の幸福に関する短論文』第1巻第1章, ゲプハルト版 p.17)。
- (2) 「属性 [attributum]」に関しては様態論とは異なった視角からのアプローチが必要な主題であり、本稿では立ち入らない (cf. Viljanen 2009)。
- (3) 無限様態はさらに直接無限様態 (1P21) と間接無限様態 (1P22-23) に分けられ、前者は「思惟においては絶対無限なる知性, 延長においては運動と静止」、後者は「無限の仕方に変化しながらも常に同一に留まる宇宙の相貌」とされる (書簡 64)。
- (4) 但し、佐藤は個物こそ無限様態であると主張する (佐藤 2004 pp.1-66 (初出 1984))。
- (5) デラ=ロッカも指摘する通り (Della-Rocca 2003), スピノザは actio, agere を広義の「行為」の意味で用いる場合と、狭義の「能動」(3Def3) の意味で用いる場合とがある。
- (6) 行為は「身体変状」、想像作用、感情、欲望は「身体変状の観念」であるが、いずれもその平行論的対応物を、前者は思惟属性の内に、後者は延長属性の内にもつ。
- (7) カーリーはピエール・ベールがこのような解釈に立ってスピノザを批判していたことに基づき、このような解釈を「ベールの解釈」と呼び、ウルフソンの、「実体」を「最高類」と見なす解釈と共に退ける。
- (8) 我々の解釈は、実体と様態の関係を因果関係と見なす点で、カーリーの洞察も取り込みうる。但し我々の因果性概念はカーリーのそれとは大きく異なっている。
- (9) causa transiens は従来「超越的原因」と訳されてきたが、我々はこの区別が自動詞的 [intransitive] と他動詞的 [transitive] の区別に相当すると考え、「他動的原因」と訳した。
- (10) チザムのような行為者因果論者もまた「内在的原因 [英: immanent cause]」に訴えるが、そこで考えられているのは、先行原因に決定されずに結果を産出する原因であり、我々がスピノザに帰している決定論的な概念とは異なっている (cf. Thalberg 1974)。
- (11) なお、木島 2011 で論じたが、ある1つの行為の他動的原因と内在の原因が共通概念または神の本質の観念を共有している限り、それらは「十全な原因」として働くことが可能である。
- (12) ロウによれば、出来事因果は事物の因果的な力を扱えない (Lowe 2009, p.165)。
- (13) ナドラーは、「神への内在 [in Deo esse]」を事物への性質の「内属」と見なす解釈 (ベール, ベネット等) と、そこで言われる「内在」を「内属」とは区別する解釈 (カーリー等) とを対比するが (Nadler 2006, pp. 73-80), 我々は前者の解釈を支持する。
- (14) スピノザへのストア主義の影響を肯定してよいなら、ストア論理学が、命題の述語として「動詞」のみを認めようとしたという点も傍証になりうるかもしれない (ブレイエ 2006)。
- (15) 同様に、ある外的事物が身体変状の維持の他動的原因であるために、それが連続的に個体に作用し続ける必要はない、とスピノザは考えていたかもしれない。例えば「投げられた石」の事例などはそのような前提を含んでいるとも解されうる (書簡 58)。
- (16) ジャレットは、神が矛盾した述語の主体になるというベールの批判を回避するため、この解釈に反対する (Jarrett 1978)。しかし我々は、個々の変状が無条件に、あるいは端的に神に帰される (述定される) ことをのみ退ければいいのであり、それが神に帰されること自体を否定する必要はないと考える (cf. Bennett 1984, pp.95-96; Nadler 2006, p.78)。
- (17) スピノザが身体変状や身体変状の観念を文法上の主語として語り、それらに例えば「強さ」といった性質を

帰属させている箇所は存在するが (e.g. 3P38, 43, 44 など), これのみでは, スピノザが「身体変状の変状」を明示的に許容している証拠としては弱い。

- (18) 両者の間には, 前者が様態一般, 後者は物体についての定義である, という対象領域の差異以外の不一致もありうる。第2の定義が成り立つならば第1の定義もまた恐らく成り立つであろう。だが, 第1の定義は満たすが, 第2の定義を満たさない事例, つまり要素諸個体が協働的に一結果を産出するが, それらが空間的に近接していないような事例をスピノザが認めるかどうかは1つの問題であろう。だが本稿では, 主に両者が共に成り立つ事例を問題にした。
- (19) *aggregatum* という用語はライブニッツ『モナドロジー』(sec. 2) より借用した。
- (20) 内在的な因果力と個性のつながりに関しては伊豆蔵好美氏よりの口頭でのご指摘を参考にした。
- (21) スピノザはこの点で, 特に生物の発生について現代の理解とは異なった考え方をしていたかもしれない。現代的な見方によれば, 生物種の進化は, 統計学的には稀で例外的な変異が自然選択によって蓄積されることで生じるが, 他方でその存続は, 恒常的な環境, つまり統計学的に非常に蓋然性が大きな状況を条件とする。つまり, 生物に関して言えば「産出の原因」と「維持の原因」は大きく異なっており, 前者は不可能ではないが非常に稀な条件であり, 後者は不変ではないが非常に恒常的な条件であることが見込まれる。スピノザがこの区別をしていないとすれば, それは恐らくある条件下でのある型の生物の発生を端的に蓋然性の高い出来事であると見なしていたということであり, この思想が, 自然法則そのものが, 一定の条件下での有機体の発生を直接に蓋然化する「有機的自然観」に近い, という可能性はある。
- (22) これが, スピノザが「運動と静止」を「直接無限様態」と呼んだときに意図していたことかもしれない(書簡64)。最単純物体とは「運動と静止, 速度の緩急のみによって区別される物体」であり, それは様々な速度の「運動」という状態そのものと同一視される。つまり最単純物体においては「物体」と「状態」(運動または静止)は完全に重なるのである。なお『知性改善論』の「確固永遠たる諸事物」を最単純物体として特定するマシュレの解釈は, 我々の解釈に近いかもしれない(マシュレ1986, pp. 226-227)。

文 献

- Bennett, Jonathan 1984 *A Study of Spinoza's Ethics*. Hackett.
- ブレイエ, エミール 2006 (原著1908)『初期ストア哲学における非物体的なものの理論』江川隆男訳, 月曜社
- Carriero, John 1995 "On the Relationship between Mode and Substance in Spinoza's Metaphysics." in *Journal of the History of Philosophy*, Vol. XXXIII, No. 2, pp. 245-273.
- Curley, E. M. 1969 *Spinoza's Metaphysics: An Essay in Interpretation*. Harvard University Press.
- Della Rocca, Michael 2003 "The Power of an Idea: Spinoza's Critique of Pure Will" in *Noûs*, Vol. 37, Issue 2, pp. 200-231.
- Heereboord, Adriani 1654 *Meletemata philosophica*. (フランス国立図書館所蔵版より複写。なお, 右記からも閲覧可能: <http://objects.library.uu.nl/reader/index.php?obj=1874-21866&lan=en#page//12/75/86/127586569949420786680234041522495072592.jpg/mode/1up>).
- Jarrett, Charles, 1977 "The Concept of Substance and Mode in Spinoza." in *Philosophia* Vol. 7, pp. 83-105.
- 木島泰三 2011 「スピノザにおける決定論的行為者因果説」, 日本倫理学会第62回大会(富山大学)での口頭発表。『日本倫理学会第62回大会報告集』p. 81に要旨掲載。
- Lowe, E. J. 2008 *Personal Agency: The Metaphysics of Mind and Action*. Oxford University Press.
- マシュレ, ピエール 1986 (原著1979)『ヘーゲルかスピノザか』桑田禮彰, 鈴木一策訳, 新評論
- Melamed, Yitzhak Y. 2009 "Spinoza's Metaphysics of Substance: The Substance-Mode Relation as a Relation of Inherence and Predication." in *Philosophy and Phenomenological Research*. Vol. 78, No. 1, pp. 17-82.
- Nadler, Steven 2006 *Spinoza's Ethics: an introduction*. Cambridge University Press, 2006.
- Thalberg, Irving 1976 "How does agent causality work?" in M. Brand and D. Walton (eds.) *Action Theory*. D. Reidel Publishing Company, 1976, pp. 213-238.

Viljanen, Valletti 2007 “Field Metaphysic, Power, and Individuation in Spinoza.” in *Canadian Journal of Philosophy*, Vol. 37, No. 3, pp. 393-418.

Viljanen, Valletti 2009 “Spinoza’s Ontology.” in Koistinen, Olli (ed.) *The Cambridge Companion to Spinoza’s Ethics*. Cambridge University Press, 2009, pp. 56-78.

A Reconsideration on Spinoza's Theory of Complex Bodies from the Point of *Deterministic Agent-Causalist* Interpretation

KIJIMA Taizo

Abstract

In another article, I proposed an interpretation of Spinoza's view on causality, according to which Spinoza conceived every kind of causation as a peculiar type of *agent causation*, namely, *deterministic agent causation*. And in this paper, I will apply this reading to Spinoza's theory of complex bodies and reconsider its conceptual structure from the point of my *Spinoza-as-agent-causalist* interpretation.

Agent causation is a kind of causation in which an agent is the cause and its action is the effect. In Spinoza, the substance or God is the agent-cause and the "modes" are its effects, and again, the modes — which are the "affections" of God and amount to particular individuals such as human bodies or other bodies — are the agent-causes and (at least some of) their affections are their effects. Namely, both of God and his modes are the causes of their affections. In Spinoza's terminology, such kind of cause is called "immanent cause". In the case of modes, they are also "transient causes" that have their effects outside them. And in causation between modes, both of immanent cause and transient cause have their own causal contribution in the effect.

We saw this model of causation has at least three levels of causal terms: substance, modes and affections of modes. Now one can ask whether there are more levels, for example, affections of affections of modes. I reply to this question affirmatively. Indeed, these levels are so many as the number of the levels of complex bodies.

Above structure of causation must be preserved in the production of complex bodies, e.g. human bodies, by other individuals. In the case of a human body, the transient causes of it are the external bodies which are necessary for production and preservation of the body. And its immanent causes are its composing bodies collectively determined to compose the body. Therefore, a human body is causally dependent on its components wholly, just as the modes on God or the bodily affections on its body. Again, these composing bodies are caused immanently by bodies composing these composing bodies, and so forth until most basic particulars or the "simplest bodies". So, the simplest bodies are the first order modes, and every other (complex) body is caused immanently and determined by the simplest bodies.

This conclusion we got may sound very similar to the *reductionist* view of human body (or human mind). But it also has similarity to the *emergentist* view as well. For, it acknowledges distinct reality of human bodies or composed individuals generally, because they have immanent causal powers.